

二松學舎大学21世紀COEプログラム

「日本漢文学研究の世界的拠点の構築」

雙松通訊

中間評価への
取り組みをふまえて

拠点リーダー 高山 節也

平成17年度活動計画

Newsletter
SOSHOTSUJIN
No.3

目次

1 中間評価への取り組みをふまえて

拠点リーダー 高山 節也

平成17年度活動計画

2 上古・中古日本漢文班

3 中世日本漢文班

4 近世・近代日本漢文班

5 朝鮮漢学班

6 漢文教育班

7 日本漢字音・辞書・字書班

8 日中文化交流班

9 書誌学・目録データ班

10 平成17年度COE研究員研究計画

- ・日本における仏典の伝入と出版に関する研究
- ・地方旧蔵資料から窺知される日本における漢学の受容
- ・上代木簡の文体と用字法の研究
- ・佛乘禪師東歸集の研究

14 寄贈資料一覧

(平成17年3月～平成17年7月)

16 活動・会議一覧

(平成17年4月～平成17年7月)

- 講演会
- 現地調査
- 諸会議

17 和刻本古文真宝書影集3

- 編集後記

中間評価への取り組みをふまえて

拠点リーダー 高山 節也

実質的に半年間の活動であった昨年度は、一部の研究班以外はおおむね資料収集と基礎的体制作り集中した感があった。本年度はCOEプログラムにおける中間評価を迎えて、相応の成果を挙げる事が課されている年度である。長期に渉る研究計画にせよ、短期的研究計画にせよ、それぞれに特定の実績をあげることが求められている。各班の目標はそれぞれに譲って、ここでは総括的な範囲に重点をおいて述べることにする。

本来このプロジェクトの目標は、4本の柱に集約されるものであった。その一つ一つについて、本年度の計画と目標を述べてみたい。

1 日本漢文学関連文献の所在調査とデータベース化

昨年度に続いて、所在調査は北陸・中部・東海地区を中心に行われる予定である。当該地区における関連文献の収蔵機関は、昨年度のそれに上回る規模があり、対象文献の量も増大するが、本年度は7・8月の夏期休暇期間を利用できるため、収集量の一層の充実が見込まれる。データベースについては、昨年度において入力システムの構築を終えているので、本年度は収集した目録資料の入力とその公開を目標としている。入力については、本プロジェクトにより収集された原本資料と、目録資料の助手による入力、および業者に委託される入力を計画しており、その総体は4万件を超えるものとなる予定である。またその公開については、検索方法の多様性と異体字問題のクリア、他機関との情報の共有のためのシステムの模索、画像におけるセキュリティー機能の研究、さらには全文データベースや目録データ・序跋データの公開などを構想し、極力その完成を目指す。

2 日本漢文学関連研究者ネットワークの構築

昨年度は漢文教育関連の世界的シンポジウムの開催を通じて、東洋における研究者・教育者の連携をめざすと同時に、欧米をも含む漢文関連研究者を招聘して、講演・スピーチ等を通じて情報収集と連携を模索した。本年度も世界における日本漢文学に関する情報の交換を、世界各地における拠点リーダーの任命と併せて、9月開催のシンポジウムにおいてその事業を継承する。各地域における拠点リーダーは、日本漢文学研究の当該地域における情報収集とその発信者として位置付けられると同時に、論

文執筆や他論文の査読、他地域との連携による研究活動の要となるなど、多様な活動が期待される。

3 漢文訓読技能の向上

現在学生の漢文訓読能力の低下について、抜本的な方法改革が必然と思われる状況において、本プロジェクトに課された使命は重い。プロジェクト採択時に文部科学省から指摘された、待望される「革新的なアイデア」の実現にむけて、新たな方法論および新たな指導理念にもとづく漢文教科書の作成が期待される。

4 漢文文献担当技能者の養成

本年度は前期に公開講座集中講義2種（漢字表記論・江戸の版本）、短期公開講座3種（和刻本漢籍について・近世書籍文化の変遷・和刻本漢籍準漢籍の書誌と情報）、および大学院との連携講座2種（漢籍書誌学・古文書解読）、通年講座2種（漢字の文化史・江戸の漢詩）を開講している。後期においても公開講座集中講義継続2種（漢字表記論・江戸の版本）、短期公開講座3種（日本漢学者と漢籍の蔵書・漢文小説『夜窓鬼談』の世界・中国医学書の特徴と変遷）、大学院との連携講座2種（漢籍書誌学・古文書解読）、通年講座2種（漢字の文化史・江戸の漢詩）を開講の予定である。

以上が本年度の基本活動の内容と目標であるが、一方、現在各班において研究されつつある日本漢文学の種々相についても、本誌に掲載された各班の目標に基づいて具体的成果を挙げる事が求められている。文系大型プロジェクトにありがちな、各個の研究の独自性による目標の分散という現象は、それなりに中心テーマへの多様なアプローチとして価値あるものであるが、同時に求心的な方向性を維持することが求められていることも事実である。本プロジェクトにおいて、日本漢文への多方面からのアプローチが、日本漢文全体をどのように把握し、日本漢文学という大きな枠組みのなかでどのような位置を占めようとするのかを、それぞれが常に意識しつつ、中間評価に向けて着実に成果を蓄積していくことが肝要であろう。

上古・中古日本漢文班

主任：白藤 禮幸

担当者：山崎 正伸・吉原 浩人・谷本 玲大

協力者：河野 貴美子

平成17年度活動計画

古代は、漢字が伝えられて、始めて文字に接した日本人が、それを借用して記録することを知り、日本が歴史時代に入った頃より始まり、漢字・漢文の学習をはじめ、漢字文をものすることができるようになった時期である。そこに生み出された文字資料は、漢文・和風漢文・国語文など多様であるが、全体としては、漢字についての共有する知識・理解があったものとする。その点で、古代にどのような文字資料があるか、その一覧表を作ることがすべての始まりであろう。

昨年来、群書類従・続群書類従・国史大系・大日本仏教全書・大正新修大蔵経・日本古典全集・古典文庫などの叢書に収められている漢文体資料のリスト作成を進めた。今年度は、大日本古記録・史料大成などの歴史関係の叢書を調査する。

この時代の、漢籍・仏典の、個々の文献の理解のための営みも大学や博士家、寺院で盛んに行われている。その形跡は、多くの仏典の注釈書の中に認められる。奈良末から残されている訓点資料は、句読点、返り点をはじめ、当に漢文読解の跡を映すものである。直接的な読み下し文はともかくとして、行間・欄外・紙背に付された音注・義注は、時代の漢字・漢文研究の姿を映し出しており、その典拠の究明も重要である。訓点語研究では、訓読文の復元を願うあまり、その方面について十分に配慮されているとは言いがたい。近時、醍醐寺・石山寺・東寺・仁和寺・高山寺などの諸寺の典籍調査がなされている。そのような資料によっても昭和6年の吉沢義則「点本書目」、昭和32年の遠藤嘉基・広浜文雄「新版点本書目」に続く、新しい訓点資料書目が作られてもいいであろう。この種の資料は、そう簡単には見られないものである。これまでの複製本刊行事業でも、出されているものはさほど多くない。そのような状況の今日にあっては、資料を披閲する幸運に恵まれた訓点研究者には、資料の原の姿を残らず伝えて、恣意的な削除は行わないよう努めてもらいたい。その一歩として、漢籍訓点資料での書き入れ注について、研究の試行を行いたい。(白藤禮幸)

「新撰万葉集」研究を課題とする山崎・谷本班では、昨年度は天理大学本の書誌調査を中心に行った。

天理図書館の申請許可を得て作成入手した写真版では判然としないが、天理大学本の原本に就いてみると、その漢詩には、句点としての点や返点の他に、ヲコト点と思われる点が附されている。

しかし、それら点の位置には曖昧な部分も見られ、また途中か

らは一切記載されなくなる。ここより推せば、天理大学本書写者による点ではなく、祖本から移点したものであろうと推察される。

同系統の他本に目を転ずると、京都大学本は朱によるかと思われるヲコト点が附されていることが影印本でも微かに確認でき、影印の公刊されていない大阪市立大学本も、かつて浅見徹氏より私信にて得た教示によれば、やはり同様の点があるようである。

『新撰万葉集』の諸本研究史上、これらヲコト点の実態について検討した論は未だかつてなく、浅見・木下両氏による私家版の校本でもカナ附訓でないこれら点類の情報は捨棄されているが、中近世に於ける日本漢詩文の享受・咀嚼という観点からも、考察してみる必要があると思われる。

本年度は昨年度調査分の整理と併せて、京大本と大阪市立大本の原本調査、また、可能であれば群書類従本の版木調査など、校本作成に向けた作業を行ってゆく予定である。(谷本玲大)

吉原浩人・河野貴美子は、「大江匡房・永観の研究—文人と僧侶の院政期漢文学—」と題し、大江匡房(1041~1111)及び永観(1032~1111)の著作に、日本漢文学の知見を生かした註釈をつけることを目指している。二年目にあたる本年度は、目に見える結果を出すため、以下の調査・訳註作業を行い、年度内に『永観講式註釈』(仮題)という報告書を刊行する予定である。

具体的には、永観『往生講式』『三時念仏観門式』その他本研究に關係する古写本を、高野山大学図書館・叡山文庫・興福寺・東大寺・薬師寺等で調査する。その成果をもとに、諸本を校合して、『往生講式』『三時念仏観門式』両書の校訂本文を作成し、文章構造や外典の出典研究等に特色を持った註釈作業を進めていきたい。この作業には、他の研究者や大学院生の参加をもとめ、原稿整理・打ち込みも依頼する。年度末には、両書について、本文校訂・読み下し・現代語訳・構造分析・註釈・解説・文献一覧からなる詳細な研究を公表したい。

また、永観『往生拾因』や、大江匡房の未註釈作品についても、諸本調査と註釈作業を並行して進め、その成果は学会等で報告しつつ論文化して、次年度以降に報告書として公開することを目指す。

なお河野は、個人研究として、奈良・平安期の南都寺院において、いかなる漢籍・辞書・音義書類が利用されていたかの詳細な調査を進めている。まずこのうち、唐・慧沼『因明義断』の院政期裏書をめぐる諸問題について口頭発表を行い、『日本漢文学研究』第一号に成果の一端を公表する予定である。(吉原浩人)

中世日本漢文班

主任：磯 水絵

担当者：田中 幸江

協力者：福島 和夫・楊 桂香・新井 弘順・ニールス グェルベルク・小川 剛生・高橋 秀城

平成17年度活動計画

昨年度末に『藤原通憲資料集』をまとめ、本年度はそれを受けて、説話文学会四月例会(総合テーマ「藤原通憲」)において、本班協力者である上野学園日本音楽資料室室長福島和夫氏が「所謂〔信西古楽図〕をめぐる」と題する講演を、事業推進担当者である田中幸江と同資料室研究員神田邦彦(本学大学院修了)がそれぞれ『大悲山寺縁起』についての一考察「楽書に見る藤原通憲」と題して通憲撰述の縁起、通憲に関わる音楽伝承についての研究発表を行った。通憲研究の第一次計画はこれでひとまず終えるが、さらに当時の漢学世界の様相を理解するために、引き続き通憲一門および周辺の研究を継続する。

また本年度は、古来の儀式典礼に欠くべからざる「礼楽」に関する基礎研究を中心に冊子『楽書便覧』(仮題)をまとめる。その中では『教訓抄』所引中国文献の研究、歴史資料という側面からの編年表、『統教訓抄』人名索引、『群書類従』管絃部の人名及び事項索引、『中右記』『山槐記』『玉葉』をはじめとする古記録の音楽関係年表といった昨年来の作業の成果を発表する。

将来計画として、東アジアから伝わってきた日本の礼楽の形成と継承については是非考究しなければならず、この基礎作業は急がれたのであるが、本年はさらに、それらを物差しとして我が国楽書中に見られる中国文献からの影響に注目していくとともに、漢字文献史料としての楽譜の有様についても明らかにしていく計画である。手始めに、上野学園日本音楽資料室蔵書目録作成作業の昨年度の成果、「楽歳堂旧蔵楽書類」他より数種の文字譜を選び、その解説を試みる。なお、同資料室の蔵書のうち、雅楽関係資料については昨年より目録を作成しており、こちらの成果も『楽書便覧』に掲載する予定である。

ところで、仏教の伝来とともに大陸から伝わった仏教儀礼の中から、漢字資料としても音楽史料としても注目される「声明」を取り上げる。同資料室にまとまった「声明」関係資料のコレクシ

ンがあるから、田中および協力者の新井弘順、ニールス・グェルベルク、高橋秀城の三氏で、目録作成と調査、研究を行い、その成果についても冊子に発表する予定である。

礼楽という観点から、同資料室蔵書中より、琴および明清楽資料を中心とした目録作成も行う。古代日本において琴は、中国で「君子左琴」と言われたごとく、天皇や貴族に愛好された。しかし、それは平安時代に早くも廃れ、琵琶がそれに代わることとなる。近世に入って琴は再び明清楽とともに文人間で盛んになるが、そういうわけで、日本の琴楽の研究は大きく二期に分けられる。そこで古代、中世の琴楽については磯が中心に調査を行い、近世のそれについては、新たに台湾の音楽研究者楊桂香氏に協力者に加わって頂き、明清楽との関係を視野に入れた調査をお願いする。できれば、琴楽関係のまとまったコレクションのある、南紀、九州方面の調査なども行い、その成果として中国、台湾、韓国等を通観した琴楽の研究が展開できればと期待される。

終わりに、磯・田中の個人研究は昨年度は上記のような共同作業の立ち上げと維持に時間を費やし、思うように進展しなかったきらいがあるが、本年度も田中は引き続き通憲研究を行うとともに、「声明」資料、中でも「講式」資料に着目した研究を行う。具体的には神祇関係の講式を取り上げ、その式文を寺院史および本地垂迹思想との関わりから考察する。また磯は、『仁王経』および仁王講の研究を続ける。院政期までの公私にわたる仁王講の実施例の確認、仁王経典の内容研究等は進展しているが、仁王講の具体的内容、仁王堂の有無についての調査が遅れている。三大会の一とされているこの講の実態調査は、儀礼研究に大きく寄与するものと考えているが、今後もさらに多くの歴史史料を調査していくつもりである。

近世・近代日本漢文班

主任：町 泉寿郎

担当者：横須賀 司久・大島 晃・揖斐 高・山辺 進

協力者：ロバート キャンベル・長尾 直茂

平成17年度活動計画

江戸および明治時代は、日本漢文学の最盛時と広く認識され、大量の伝存資料があり、質的にも高度な創作・研究が残されているが、それを対象とした研究の蓄積は不十分である。17年度は、16年度の計画を継承するとともに、新たな計画を加えて、和刻漢籍・準漢籍・日本漢文にわたる、以下の基礎的研究を行う。

課題1「和刻漢籍の祖本研究」「漢籍の考訂・校勘の研究」「江戸前期の漢籍注釈の研究」

本課題は、和刻本漢籍・準漢籍に関する基礎となる研究であり、江戸漢学研究の根幹をなす内容であるが、今後の開拓に俟つところが多い。大島晃担当者・長尾直茂協力者を中心に調査研究を行う。現在、これまで個別に進めて来た『性理字義』『老子盧齋口義』『三国志演義』に関する研究を、その事例研究として位置づけ、本課題の基本的方向を明らかにする作業を進めている。

課題2「日本近代における漢学・漢文学」

1) 江戸と明治の接点、2) 明治後半より大正・昭和初期

本課題は、近代黎明期の回顧を通して日本漢文学の意義を求めめるものであり、日本漢文学研究不振の原因を近代的学問分化の一方で伝統文化の喪失にあるとみて、諸分野の新たな結合によってその回復をめざす本プログラムの理念に直結する内容である。殊に明治後半から大正・昭和初期は、従来、漢文学の衰退期ととらえられることが多く、その時期の漢文学の軌跡を明らかにすることは、この分野の先駆的な意義を持つ。江戸から明治に関しては、昨年度に引き続き、町泉寿郎担当者および清水信子研究員を中心に、江戸後期の大田錦城を嚆矢とし明治期にいたる考証学の学統を研究し、その成果をまとめる。明治後半から大正・昭和初期に関しては、山辺進担当者を中心に、研究を進める。本年度は、昨年度より収集してきた諸資料に基づき、随鷗吟社の活動について調査分析を行い、その成果をまとめる予定である。

課題3「江戸・明治期漢文資料の目録作成」

1) 漢詩文、2) 漢学

漢文資料は、国書の広範囲に散在していると見られるが、ふつう目録に文体の記載がない以上、主な対象としてふたつのピーク(学問・思想のなかの漢学と、文学のなかの漢詩文)をまず想定するのは、むしろ自然であろう。今年度は、当該資料の範囲を概括する意味で、年表形式の目録作成を行う。随時、揖斐高担当者・ロバート キャンベル協力者と意見交換しつつ、町泉寿郎・竹下悦子(日中文化交流班)担当者、および漢詩文を新井洋子(本学非

常勤助手)、漢学を岡野康幸研究助手が担当して作業を進める。

課題4「日本漢文学史テキスト・倉石武四郎講義ノート」の整理刊行」

従来必ずしも明確でない日本漢文学の沿革・概要を、どのように内外に示すかは、本プログラムに課せられた大きな課題のひとつである。この問題は他面、漢文教育における日本漢文学史テキスト編纂とも密接に関係する。本課題は、この要求を満たすために前年度途中から新たに着手した。大島晃・町泉寿郎・佐藤進(辞書字書班)の各担当者、清水信子研究員、長尾直茂・戸川芳郎(総括班)・河野貴美子(上古中古班)の各協力者による定期的な検討会を行いつつ作業を進め、今年度中の刊行をめざす。

課題5「漢方医書研究—日本医家伝の刊行等」

江戸時代の医学は漢学と関連の深い分野であると認識されており、また本プログラムが狭義の漢詩文にとどまらない広い分野を対象とすることを明示する上でも、本課題の持つ意義は大きい。とくに、従来不足している日本医家伝記に関する基礎文献の公刊は、近世文学・日本史・医学史・科学史など多方面からの関心を期待できる。町泉寿郎担当者、小曾戸洋協力者(目録DB班)を中心に作業を進め、日本医家伝記資料中、最大規模の『日本医譜』(現存68巻)の電子テキスト化を今年度中に完成をめざす。

課題6「日本漢学者伝記情報に関するデータベース作成」

本課題は、日本・中国の文学・思想・芸術等、諸分野の研究者から要望が多く、また本プログラムの目録データベース班のデータベースが書籍を対象としているのを羽翼する意味からも、人物情報のデータベース化は不可欠である。随時、揖斐高担当者・ロバート キャンベル協力者との意見交換を行いつつ、町泉寿郎・竹下悦子(日中文化交流班)担当者を中心に作業を進める。

課題7「三島中洲研究」

本学の学祖三島中洲(天保元1831~大正八1919)は、幕末・明治・大正を生きた漢学者であり、それぞれに時代における漢学の意義(政治的・社会的・文化的等)を具体的に考察する上で、恰好の対象である。また本学には比較的豊富な中洲関係資料を有し、資料的条件に恵まれている。そこで前年度から毎月の研究例会を開き、日中近代史・中国思想史・日本教育史などからの多面的な研究報告を積み重ねてきた。それをうけて、本研究班の活動の一環として「三島中洲研究」を位置づけ、基礎資料の解読・年表の作成などの基礎研究を行う。

朝鮮漢学班

主任：小川 晴久

担当者：渡邊 了好

平成17年度活動計画

一、「韓国漢文学研究」のバックナンバーの収集

韓国漢文学研究会は現在まで機関誌『韓国漢文学研究』を第35輯まで出している。だいが欠号があるとのことだが取扱い出版社太学社からバックナンバーを購入する。

二、韓国漢文学研究に関する専論ならびに専著(主なもの)の収集

上記一の『韓国漢文学研究』に収められていない韓国漢文学研究に関する理論的考察をしている専論・専著を収集する。

三、朝鮮漢学と仏典研究の関連の考察

漢学を経学と解するとき、仏典研究は含まれない。しかし仏典が漢訳仏典である限り、仏典研究は漢学に含まれてよい。まして三教(儒・仏・道)に親しんだ思想家や文人を研究する場合は広義の漢学や漢文学研究に含まれる。この点は日本も同じ事情なので(本家の中国においてさえ同じ)、朝鮮・韓国の場合はどうなのかを調査する。

四、懸吐入りの漢籍(含仏典)の収集

朝鮮式漢文の読み方を示す吐入りのテキストを儒書に限らず、仏書にまで広げて、代表的なものを収集する。

五、朝鮮総督府時代の漢文教科書(コピー)の収集

この収集は一部国内(東書文庫)でできているが、韓国の大田市にあるハンパツ(大田の意)教育博物館で調査し、コピーによる収集につとめる。

六、北朝鮮の漢文教科書(コピー)等の収集

韓国ソウルにある「北韓資料センター」(政府統一部所属)が所蔵する北朝鮮(朝鮮民主主義人民共和国)の漢文教科書の内容を調査する。漢文教科書や国語教科書にはいわゆる古典教材がほとんどとられていないのが特徴であるが、最近同センター

所蔵の『文学』(高等学校4年生用、1997年8月刊)が古典中心であることに気づいた。これはとてもうれしい発見である。しかしこれは最近の傾向であって、以前にはなかったという指摘もあるので、古典中心の『文学』の教科書がいつ頃から登場したか、調べる必要がある。

七、李退溪と山崎闇斎学派の研究

朝鮮の朱子といわれる李退溪の著作が江戸時代にどれほど板行され、読まれたかの調査は故阿部吉雄先生が生涯かけて取り組まれた。阿部先生の蔵書が栃木県の足利学校文庫に寄贈されていることが、このたびわかったので、このたび第1回調査に当たった。阿部先生が収集された「11種46巻45冊(合冊して30冊)」がもとになって『日本刻版李退溪全集』上下巻が刊行されたこと、とくに『自省録』中の阿部先生の書き込みの大半が山崎闇斎とその学派のものであることがわかった。李退溪を山崎闇斎学派の関係につき、阿部先生の先行研究をふまえて、その詳細を把握していきたい。

八、韓国奎章閣所蔵日本漢籍調査

朝鮮王朝図書室奎章閣に所蔵される日本漢籍の調査を協力者 芹川哲也氏に願う。

九、ソウル大学図書館所蔵日本漢籍調査

京城帝国大学時代の図書がソウル大学図書館にそのまま残されている。その中に日本漢籍がどれだけ所在しているか協力者 芹川哲也氏に調べていただく。

十、日本国内所蔵の朝鮮本の調査

すでに作成されている諸文庫の朝鮮本目録をコピーで集めファイル化する。

漢文教育班

主任：青木 五郎

担当者：小川 晴久・吉崎 一衛・山辺 進

協力者：宮内 保・吉原 英夫・石毛 慎一・小金澤 豊

平成17年度活動計画

本年度は昨年度にひきつづき、次の三つの事業について推進する。

- 一、大学漢文教科書の作成
- 二、明治以後の漢文教科書の収集とそのデータベース化
- 三、近代漢文教育史の研究

一、大学漢文教科書の作成

1、本年度より新設された総合科目「基礎漢文A」（春semester）、「基礎漢文B」（秋semester）に対応するテキストの改訂版を作成する。

2、中国文学科用授業科目「中国文学演習①」（基礎読解法）に対応するテキストの試行本を作成する。

※ 「基礎漢文A」（韻文）は吉崎が、「基礎漢文B」（散文）は小川が、「漢文読解法」は青木が、それぞれ主として作成に当たる。

二、明治以後の漢文教科書の収集とそのデータベース化

1、漢文教科書の収集

(1) 古書店（文行堂、松雲堂ほか）に収集を依頼して購入

(2) 筑波大学附属図書館蔵本の複写

約100種の漢文教科書（含指導書）の所蔵が確認されており、昨年収集分との重複を除いた分について複写する。

(3) 北海道教育大学附属図書館蔵本の複写

札幌・函館・旭川の三分校に約70種の漢文教科書（含指導書）

の所蔵が確認されており、既収集分との重複を除いた分について

複写する。

(4) 鳴門教育大学附属図書館の複写

昨年度その一部を複写したが、まだかなりの数が残っており、既収集分との重複を除いた分について複写する。

2、収集教科書のデータベース化

本年度は1、により収集した教科書について、昨年度収集分も含め、凡例・目次（教材）のデータベース化を行う。

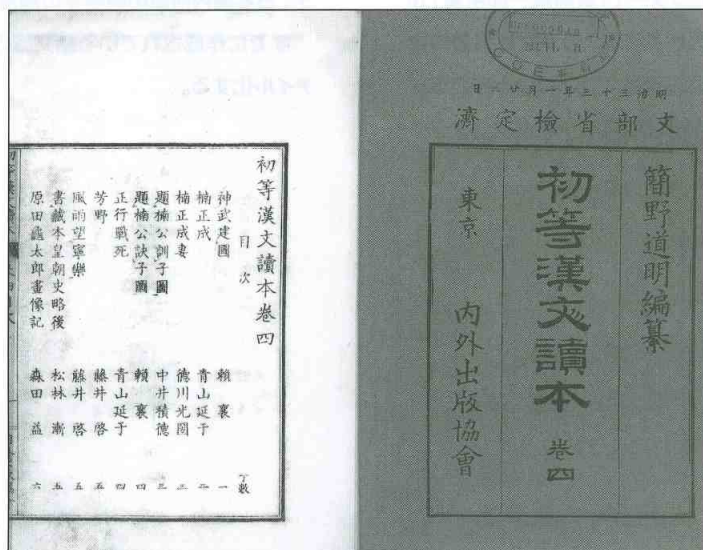
来年度以降は、国立教育政策研究所、東書文庫の協力が得られるならば、両図書館所蔵の教科書についても同様のデータベース化を行い、近代漢文教育史研究の基礎固めを行う。

三、近代漢文教育史の研究

1、事業推進担当者、本学大学院生の有志を中心として、学外の研究者の協力を得て、研究会を組織し、収集した資料を用いて、明治以後の漢文教育の歴史について研究する。

2、研究会は年4回程度開催し、学内外の研究者によるテーブルスピーチのほか、各自の研究についての進捗状況、成果などを発表し、相互に研究、検討する。

3、平成19年度（又は20年度）を目途に、研究成果についての論文集を発行する。



日本漢字音・辞書・字書班

主任：佐藤 進

担当者：白藤 禮幸・谷本 玲大

協力者：大島 正二・小方 伴子

平成17年度活動計画

当班は、昨年度はたまたまCOEメンバーに語学専攻の専任教員がいなかったために暫定的なかたちでスタートし、実質的な活動は平成十七年から開始ということになった。とりあえず拠点リーダー高山教授から提供されていた資料を検討しつつ、これまでの暫定計画を大きく逸脱しない形でこれからのプログラムの計画を立てた。すでにいくつかの会議で趣旨を説明して了解を得たものではあるが、班員の諸先生に充分なご相談をする機会がなかったことをお詫びすると同時に、積極的なご意見を賜わるとお願い申し上げる。

当班は、班員諸先生のご研究分野を勘案し、以下のような二本建てでゆくことにした。

(1) 楊伯峻《文言文法》編訳と訓読法による処理のコメント

漢文訓読の基本的な教授法では句法の習得が大きな比重を占めているが、実際に少しでも古い訓点本を開いてみれば、パターン化して整理された句法におさまらない読み方がふんだんに出てくる。また、白文を読み下すには、原文である中国の文語文の文法を解析することが求められる。さらにまた、古辞書の和訓の根拠が、字義というよりは原文の文法に基づくことがある。

たとえば、前置詞として使われる「以」字である。ふつうは「モッテ」と訓読するが、『類聚名義抄』には今ではほとんど使われない「コレヲモッテ」という訓がある。これは実は、原文に前置詞の目的語を強調するためにその目的語を前置詞の前に引き出す構文がある場合、それを読むために工夫された訓法なのである。

一例として『左伝』僖公四年「楚国、方城以為城、漢水以為池」について言えば、江戸中期以降の読下しでは「楚国は、方城もって城と為し、漢水もって池と為す」と読むが、江戸初期、藤原惺窩門下の堀杏庵は「楚国、方城これをもって城と為し、漢水これをもって池と為す」と訓読する。この読みが『類聚名義抄』の「コレヲモッテ」にあたる。

こうしたバックボーンを検証するために、文語の語法書である

楊伯峻《文言文法》を訳出し（研究協力者・小方伴子が担当）、そこに例示された例文が「訓読」される際に、日本の先人たちがどのような処理をほどこしたかについて丁寧にコメントして（佐藤が担当）報告書を作成したい。

ちなみに、築島裕博士の『平安時代に於ける漢文訓読語に就きての研究』では、例文「白檀以塗畫圓妙漫茶羅」（大日経巻第一）に含まれる「以（コレヲモッテ）」を「「以」が文中に在って接續詞的に用いられる場合で、現在では普通モッテと訓ぜられる所である」とする（pp.407-408）。しかし、この「以」字は前置詞であるはずで、例文は強調構文にあたるものだ。こうした誤解を避けるためにも、中国語における文語文の文法論を体系的に把握しておくことが重要であろう。

(2) 古訓データベース作成

日本製漢字字書『類聚名義抄』は和訓の豊富な字書であるが、そこに記載された和訓がいかなる漢文脈のなかで使われたか、その実例を逐一指摘した研究はない（部分的に、『遊仙窟』や『白氏文集』の訓が採用されたという研究はある）。そこで、本プログラムでは、『遊仙窟』や『白氏文集』、さらには、古訓を比較的多くとどめ、影印本があって利用に便宜な堀杏庵点『春秋左氏伝』と寛文年間刊六臣注『文選』の二種の訓点から前項の「以」字のような『類聚名義抄』に合致する訓を検索して例示し、「親字・和訓・例句」データベースを作成する。資料としては決して十全ではないが、その成果をもとに今後もほかの書籍について調査を続ければ、『類聚名義抄』古訓考証ができあがるはずである。

作業方針の具体的手順は、まず、すでに佐藤が入力済みのユニコード字表をもとに『類聚名義抄』の標出順にしたがって配列し直す（当面は『類聚名義抄』すべての標出字を扱うわけではない）。それにアルバイターが『類聚名義抄』の「親字・和訓・例句」データベースを作成し、その結果については班員がチェックしたうえで報告書を作る。

日中文化交流班

主任：佐藤 一樹

担当者：竹下 悦子

協力者：陳 捷・劉 建輝・戦 暁梅

平成17年度活動計画

今年度の活動における主要な柱は、研究分担者がそれぞれ計画する二つのシンポジウムである。竹下悦子は「論語シンポジウム」を11月の予定で企画し、佐藤一樹は「漢文学の近代的転回」シンポジウムを9月に開催する。ともに一回限りの催しではなく、coeプログラムの研究プロジェクトの一部として、次年度以降も継続する予定である。

まず『論語』のシンポジウムの概要について述べると、『論語』は比較的早期に日本にもたらされてより、様々に日本文化に影響を与え続けてきた。日本における論語受容の様相をたどることは、そのまま日本漢学形成史の典型を跡付けることにもなる。同時に、日本人の精神形成に多大な影響を与えた論語と儒教思想とは、原典の正確な読み取り、解釈の上に立つものがあると同時に、様々な誤読され、その誤読から日本独特の解釈を生むことにもなった。中国における経学的論語理解を離れた、日本独自の論語解釈を追う事もまた、日本漢学の一側面を浮き彫りにするものと考えられる。さらに、今に至るまで綿々と読み続けられる論語の魅力の掘って来る所を探ることにより、論語の、さらには中国古典全般の教養書としての可能性を明らかにすることができるのではないかと考える。それはとりもなおさず現代における日本漢学の可能性を追求することにも繋がる。

以上のような趣旨に基づき、本年秋に第1回の論語シンポジウムを開催する。中国思想、漢学形成史から見た論語の日本の受容について、昭和精神上にみる論語の影響、高等学校における論語教育の可能性などについての報告ののち、討論の中で如上の課題に解明の糸口を探したい。以後、漢学形成史上に於ける論語の受容形態の特性、教養書としての論語の可能性の2つのテーマを中心に、定期的にシンポジウムを開催することを企画中。

9月10日に開催する「漢文学の近代的転回」もまた、日本の近代における漢文学、漢学、漢文体の意義を問い直そうというものである。近代に入ってから文化と社会の変容の中で、日本語の中の一文体としての漢文、漢文読み下し文、文芸・学問の一ジャンルとしての漢文学、そして知識人の一員としての漢学者はどのようなポジションを喪失し、またどのような新たなポジションを獲得したのだろうか。中等教育課程で漢文教育が続けられて

きたこともあって、近代以降の漢文、漢文学についてはそのカリキュラムや教材などに関心が集まるが多かった。そこから浮かび上がるのは、国語教育における比重が徐々に削減されていく流れと、その趨勢を嘆きつつも必死に抗い、さまざまな努力や工夫をこらし、あるいは関係当局に嘆願する当事者たちの姿である。近代での漢文や漢文学について、衰退の文脈で語られるのでなければ、体制教学の烙印が押されることが多いが、それはもっぱら公教育の展開にそって眺めた場合の話である。教育に限ってみても、民間の塾やさまざまな出版物、あるいは習い事など、学校以外にさまざまな経路が存在したことも目を向けなければならない。書道やそろばんと並んで、漢文漢詩の塾も昭和前期頃までは日本全国に散在していたことが確認できる。文学はいうまでもなく、学術や芸術、あるいはひとびとの人生観や社会観のなかに漢文学、漢学の濃厚な存在を読みとることはそれほど難しい作業ではない。にもかかわらず、それらが近代日本の文化の表と裏それぞれの部分で持続と再生の営みを続けてきたことについて、これまで総合的に捉えられることはなかった。本班のもうひとつの柱である論語シンポジウムの企画にも通底している課題だが、日本の近代文化に漢文学の形跡を見いだす作業は、公定文化に関心が傾きがちだったこれまでの文化史を書き換える作業の一環と位置づけられるのである。もちろんこうした試みは多くの智恵と時間が必要であり、今回のシンポジウムを契機に、定期的な研究会の組織化につなげていきたいと考えている。

書誌学・目録データ班

主任：高山 節也

担当者：町 泉寿郎・谷本 玲大

協力者：高橋 智・真柳 誠・小曾戸 洋

平成17年度活動計画

本班は書誌学関係の研究調査活動と、データベースの構築の二方向を班活動の両輪としている。この両輪は一見密接な関係にあるものごとくであるが、その実、書誌学的厳密さがデータベースの効率性によって阻害される部分のあることは是非もない(本来はそうあるべきではないし、そのための模索もなされてはいるが)。したがって書誌学的方向性としては、本プロジェクトにおける技能者養成講座における技能講習と、和刻本漢籍における邦人序跋集成の作成という二方向でプロジェクトへの貢献を目指すこととした。

1 邦人序跋集成について

和刻本に附された邦人序跋については、これまで著名人のものは別としても、序・凡例・跋・識語等、特に江戸期における漢学者あるいは書肆、藩主や出版のパトロンなどをも含めた網羅的集成の存在は前代未聞で、これの完成は日本漢文学における邦人の関与と、時代背景と漢文学の相関関係を知る貴重な資料を提供することとなる。本来ならば収集対象として、準漢籍・日本漢文関係書もすべて含んだ総括的对象を設定すべきであろうが、実質的にあまりにも膨大な量となるため、まず対象を和刻本漢籍に限定することとした。

今年度は、一般漢籍として経部の諸文献と和刻本仏典および和刻本医学書を想定して収集を行う。すでに昨年度から実績をあげているグループもあり、北里東洋医学研究所蔵書や成田山仏教図書館の仏典については、すでにかかなりの量の資料収集が進行中である。一般漢籍としては、現在二松学舎大学図書館蔵書中の経部については調査を終了しており、慶應大学斯道文庫調査、および東京近在の各図書館等の文献調査を継続実施して、年度末にはこれを公開することを目指す。次年度以降も史部・子部・集部と継続調査を実施すると同時に、既調査分野への補充を不断に継続する。

2 日本漢文学関連文献の所在調査とデータベース化

この分野の活動は単に本班が実施するという個別化されたものではなく、本プロジェクト全体の目標に係わる、しかもその中でも特に重要な項目であるというべきものである。

まず資料調査としては、昨年度に続いて北陸・中部・東海地区を中心に行われる予定である。当該地区における関連文献の収集機関は、昨年度のそれに上回る規模があり、対象文献の量も増大するが、本年度は7・8月の夏期休暇期間を利用できるため、収集量の一層の充実が見込まれる。

データベースについては、昨年度において入力システムの構築を終えているので、本年度は収集した目録資料の入力とその公開を目標としている。入力については、本プロジェクトにより収集された原本資料と、目録資料の助手による入力、および業者に委託される入力を計画しており、その総体は4万件を超えるものとなる予定である。またその公開については、検索方法の多様性と異体字問題のクリアー、他機関との情報の共有のためのシステムの模索、画像におけるセキュリティ機能の研究、さらには全文データベースや目録データ・序跋データの公開などを構想し、極力その完成を目指す。

現時点で計画中の入力項目について、参考までに以下に示しておく。

書籍情報登録項目

情報公開	公開・非公開
分類	四部分類 項目選択 十進分類 項目選択
書名1	書名 かな
書名2	書名 かな
統一書名	書名 かな
編著者名	編著者名 かな
出版事項	刊年 出版者 出版方法 冊数
備考	
画像	画像1 公開・非公開
	画像2 公開・非公開
	画像3 公開・非公開
	画像4 公開・非公開
収蔵機関	名称 所在地 函架番号 目録名 頁番号

平成17年度COE研究員研究計画

COE研究員：會谷 佳光

日本における仏典の伝入と出版に関する研究

本年度は、昨年度に引き続き、日本で編まれた仏典関係の目録を活用して、日本における仏典の伝入状況を究明するとともに、こうして伝入された仏典にもとづいて日本で出版された仏典、所謂和刻本仏典の総合的な調査・研究を計画している。具体的には、江戸時代に出版された和刻本仏典の版本調査と、その成果にもとづく解題目録『江戸時代出版和刻本仏典目録』（仮）の作成を中心に予定である。

版本調査に関しては、昨年度、調査に先立って行った、本学附属図書館・東洋文庫・内閣文庫・東京大学総合図書館・国立国会図書館の漢籍分類目録からの和刻本仏典の抽出作業によって所蔵が確認された約二千五百点余の仏典のうち、本学附属図書館・東洋文庫所蔵分の調査をすでに完了した。これに加えて、成田山仏教図書館での入庫調査によって、現時点で五百点近く調査を行い、現在も調査を進行中である。本年度は、引き続き成田山仏教図書館の調査を行うと同時に、国会図書館・内閣文庫・東京大学総合図書館の調査に入る予定である。また機会が得られれば随時上記以外の機関の調査も行いたいと考えている。

一方、『江戸時代出版和刻本仏典目録』（仮）に関しては、本研究計画の調査対象が江戸時代出版の和刻本仏典であることを考慮して、寛文九年から天和元年にかけて雕版され、その後の仏典出版に大きな影響を与えた黄檗版大蔵経を、目録の基幹に据えることにした。黄檗蔵はおよそ千六百点余の仏典を収める大部な仏教叢書であり、これだけでも和刻本仏典の大多数を網羅することができる。なおかつ、その目録である「黄檗蔵目録」（その内容は明北蔵の目録である『大明三蔵聖教目録』そのものである）が『昭和法宝總目録』第二巻に収録されており、その整理者によって『大明三蔵聖教目録』の各著録仏典に附された整理番号は、これまでの黄檗蔵の整理においてもたびたび使用されてきた。よって、この目録を柱として、その各著録仏典にこの整理番号を附し、それぞれに調査済みの版本、及び各機関の目録上で確認し

た版本（随時調査の予定）を配していこうと考えている。これは、江戸時代の仏典の出版状況を考察する上で最も着実な方法であり、そうして明らかになった出版状況から、本研究計画のテーマである江戸時代における仏典の受容と伝承の実態を考察することも可能となるであろうと考えている。

最後に、本年度に予定している以上の調査研究が、「研究計画」全体のなかでどう位置づけられるか述べておきたい。冒頭に「日本で編まれた仏典関係の目録を活用して、日本における仏典の伝入状況を究明するとともに、こうして伝入された仏典にもとづいて日本で出版された仏典、所謂和刻本仏典の総合的な調査・研究を計画している」と記したが、これは要するに、本研究課題を遂行していく上で、大きく分けて目録学からのアプローチと、版本学からのアプローチの二つの方法があり、これを同時進行の形で進めていくのが最も有効であることを述べたものである。ただ、和刻本仏典の種類・版の多さに加え、これら仏典に版本学的立場からの専門的な調査の手がほとんど入っていない現状にかんがみ、版本調査を第一優先にした次第である。一方、目録学からのアプローチを今後どのように進めていくかについては、この『江戸時代出版和刻本仏典目録』（仮）に「目録著録状況」の項目を立てて、中国及び日本の様々な目録上に著録された仏典を時代順に配列していくことで、中国で翻訳著述された仏典が、日本にいつ頃伝入してきて、どのように受容されていたかを一覧できるようにしたいと考えている。

ただし版本調査の重要性和それに要する時間から考えて、本年度一年間で実際にできることは限られてくるであろうから、この『江戸時代出版和刻本仏典目録』（仮）と平行して、唐・釈宗密著『禪源諸詮集』を題材にして、目録学・版本学の両面から、中国における著述から流伝、さらに日本への流伝と受容の有様について考察する予定である。これを例として、本研究計画の目指すところを示したいと考えている。

平成17年度COE研究員研究計画

COE研究員：清水 信子

地方旧蔵資料から窺知される日本における漢学の受容

日本における漢学の受容を研究していく上で、伝来した漢籍とそれに伴う日本人による鈔本、注釈書、講義録である抄物、その他和刻本等の文献資料を通して、主に書誌学的な面から接近していくという方法があるが、対象とする時代を近世江戸期以降とした場合、出版、流通が発達してきた当時においてそれは、より有効的な手段であろう。中でも、地方において、その土地を拠点とした漢学者をはじめ知識層の旧蔵資料、及び無名の不特定多数者の旧蔵資料からは、江戸、京都、大阪といった都市のそれよりも、あるひとつの文献の日本における受容の広範性、及び伝播状況が把握できるものとして、その調査は不可欠であろう。そこで今回、研究の主題を「地方旧蔵資料から窺知される日本における漢学の受容」として、まず、一個人の旧蔵資料、次に、その他各地域に残され集積された漢学関連資料、という二つの面から考察していく。

一、伊藤忠岱旧蔵医学・漢学関連資料の整理と研究

地方における一個人の旧蔵資料として、昨年度より、近世後期、郷里信濃を拠点とした漢学者伊藤忠岱（名祐義、字忠岱、号鹿里・潜龍齋・仰継堂）の旧蔵資料を対象とし、それについて調査、整理してきた。

昨年度の研究過程としては、忠岱の旧蔵資料約600部1000冊以上の中から医学・漢学を中心として約230点弱について調査し、基本的な書誌事項の確定、またそれによる整理、分類、そしてその目録化を中心に行った。

調査資料について、各分野の概数は、医学関連資料が約150点、漢学関連資料が約70点、その他、随筆等が約10点となっている。医学、漢学両関連資料については、ともに日本人による編著である国書と中国人の編著に日本人が注釈を施した準漢籍に大別され、医学関連資料については、師南涯他、東洞、北洲、羸齋等吉益家をはじめとして、同門の中川修亭等の編著による国書が約120点と大半を占め、残る準漢籍は、主に『金匱要略』『傷寒論』等に関する注釈となっている。一方、漢学関連資料については、経部子部の二部に限られた準漢籍がほとんどで、中でも経部の数の方が勝る。その経部では『周易』関連の易類、『孟子』『大学』『中庸』関連の四書類が多く、子部では「医学関連資料」に含めた医家類に次いで、道家類が多く見られる。残る国書については、全て漢学方面における師大田錦城による著作となっている。

本年度の課題としては、既調査資料の中から、漢学関連資料について大田錦城関連資料、中でも錦城の講義を忠岱が筆記した「聞書」について検証し、当時の錦城の講義形態、解釈・研究方法といった学問態度全体について考察していきたい。次に、各資料の書写識語には、書写年代、

状況等、また講義録の場合、その講義日時等が詳細に記録されているため、それらを詳察することにより、忠岱の事績、錦城の講義状況はじめ周辺の人物との交友関係等が窺知され、それについても整理していきたい。また、それら忠岱自筆資料に関しては、忠岱筆記資料、及び自筆資料との関係が明記されていたり、その書写面から両者の関係が懸念される資料も各機関には散見するため、その伝播状況も看過できず、検討する必要がある。そこで、可能ならばこれについても検討してみたい。

二、未整理漢字文献資料調査、整理、目録作成

昨年度は、個人研究と並行して、二松學舎大学COEプログラム平成16年度漢字漢文文献調査地域に該当する秋田市立土崎図書館山文庫において収集された漢字文献資料300余点についての目録を作成した。これらの資料整理、及びその目録化作業については、個人研究における研究主題である「地方における旧蔵資料から窺知される漢学の受容」という観点によれば、重要であり、看過することはできない。

土崎図書館には、この他、不特定多数者により随時寄贈され蓄積されている未整理、未調査の主に近世から明治初期に出版された漢字文献資料類が残されているが、日本全国にはこの他にも、このように長年に亙りその土地の人々により持ち寄せられたことにより蓄積されながら、あらためて整理されていない資料群は多数見られることであろう。このような地方における、時代、旧蔵者不特定の漢文資料群については、それを調査し、その特性を分析することにより、各地方の学術全体の傾向も窺測されることであろう。よって研究の主題とした「地方における旧蔵資料から窺知される漢学の受容」を考察していく上でも、それらの解明は不可欠であろう。

また、それら未整理資料の中には文化的資産たる貴重な資料も含まれていることもあり、それらを次代に伝承していくという点で、それらの調査、整理は大いに意義があることはもちろんのこと、本COEプログラム事業の基幹の中心である日本における漢字文献資料の所在調査、及びそれらについての日本全国を網羅したデータベースの構築においても、改めて調査、整理する必要性は高く、また責務でもあろう。そこで、今後も、各機関に所蔵される未整理、未調査漢字文献資料群があれば、随時、それらの調査、整理に着手していきたい。

平成17年度COE研究員研究計画

COE研究員：金子 正孝

上代木簡の文体と用字法の研究

文字のなかった日本に漢字漢文が移入され、和語を表記し始めたのはいつ頃であるのか。

文字資料では、五世紀頃とされる『稻荷山古墳鉄剣銘』『隅田八幡神社人物画像鏡銘』などに漢字漢文の使用を確認できることから、四世紀頃には渡来人により日本で漢字漢文表記がなされたと考えられている。その後、訳語と和語の結びつきから訓の用法が成立したと考えられ、やがて万葉仮名文や宣命体など、語順や発音が違う中国語の漢字を用いて和語を表記する工夫が確立された。しかし、資料の数が少なく、年代の確定が困難なことから、その変遷の詳細をたどることは困難である。そこで、まとまった資料が確認できる推古朝以降の文字資料から上代語を明らかにする必要がある。同時代資料に恵まれている最も古い時期は奈良時代で、『古事記』に変体漢文や宣命体、『日本書紀』に純漢文体、万葉がな表記の歌謡や訓註、『万葉集』に万葉がな表記や多くの借訓表記をみることができ、これまで多くの考察がなされてきた。また、第一次の資料では金石文や正倉院文書が古くから整理・考察が行われてきたが、近年では木簡の記載事項が注目される。

文字資料としての木簡には、以下の特徴がある。

- ① 当時の墨付きが残る第一次の資料であること。
 - ② 記紀万葉では知り得なかった日常で使用された文であること。
 - ③ 年紀や国郡郷里制などの記載事項、出土遺跡や遺構から年代の特定が可能なこと。
 - ④ 郡符木簡により、大和地方以外での漢字使用の一端が確認できること。
 - ⑤ 文書、習書、荷札など、内容別の木簡があること。
 - ⑥ 今後の発掘調査から、更に出土件数の増加が予想されること。
- このような特徴は他の上代の文字資料にはないことから、文体史、文字史、語彙史、待遇表現史など、多くの面で研究の進展が期待

されている。それにもかかわらず、国語学からの考察は遅れており、現状での整理が必要であろう。木簡は主に、漢文体を一部に使用した和文体、いわゆる変体漢文で書かれている。しかし、どのような場合に語序の破格がみられるのか、そこに記された漢字の用字法は中国の影響を受けているのかどうか、その実態はよく判明していない。そこで、COEプログラムでは、日常文で和習があらわれる傾向を明らかにすべく、木簡の文体と用字法を扱う。

文体では、語序の破格、漢文訓読語の使用を調査する。木簡の文体は、一部に漢文体を混ぜた和文体、いわゆる変体漢文で書かれている。そこで、漢文体、和文体の使用される傾向を探りたい。手順であるが、各遺跡の出土報告書や奈良文化財研究所「木簡データベース」から文書の木簡をリスト化し、可能な限り写真で表記を確認する。そして、破格のあらわれやすい条件を考察する。現在は、目的語—動詞、補語—動詞の順で書かれている事例の抜き出し、「不」「如」など漢文特有の語にみられる破格、「解」「移」「符」「牒」などの文書木簡にみられる語序の破格を調査している。以上をまとめ、木簡にみられる語序の破格がどのような場合に起こりうるのか、その傾向を導き出したい。また、漢文訓読語については、否定、使役、待遇表現などにどのような漢字が使用され、どのような語順で書かれているのか、調査する。現在は、否定、使役表現を中心に事例を集めている。やがては上代の文献での研究成果と比較・考察したい。

用字法では、木簡に使用されている漢字が中国語の用法と同じであるのか、和化した用法がみられるのか、その実態を探りたい。この分野は文献類を中心にこれまで多くの研究がなされている。そこで、先行研究に導かれながら、木簡での使用の特徴を探るべく調査を開始する予定である。

『佛乘禪師東歸集』の研究—諸本の整理と本文系統に関する考察—

1. 研究動機

五山文学黎明期の禅僧・天岸慧廣(一二七三～一三三五)は無學祖元、高峰顯日に師事し、夢窓疎石の法兄にあたる。また在元中に明極楚俊や竺仙梵儒らの高僧を説得し、日本に招来した功績は決して軽いものではあるまい。その天岸慧廣による偈頌集『東歸集』は、いくつかの諸本が現存している。中でも自筆本は重要文化財に指定されており、その資料としての価値は広く世に認められているところである。にもかかわらず、『東歸集』自体の研究はほとんど為されておらず、上村観光編『五山文学全集』と北村澤吉『五山文学史稿』に収録される解説、山岸徳平校注『日本古典文学大系』八十九巻(岩波書店)にわずか四首の訳注が取り上げられているのみである。

このことから稿者は『東歸集』の諸本を調査、その本文系統などを明らかにし、また諸本間に見えてきたさまざまな問題について考察したいと考えている。

2. 『東歸集』の諸本と本文系統

『東歸集』の本文は大別すれば、自筆本系(鎌倉末～南北朝初)と版本系(元禄十六年)の二つに分かれる。さらに、版本も本文を比較した結果、二つの系統に分かれることが分かった。

また、『国書総目録』に掲載されていない資料もいくつか確認された。東京大学史料編纂所に「神奈川報国寺蔵本写」の写本の記載があるが、厳密には明治期と大正期の二冊の写本が存在している。お茶の水図書館(成實堂文庫)には、『東歸集』(元禄十六年)だけではなく、『東歸集』(無刊記本、徳富蘇峰の書入れ有り)が存在していた。駒澤大学図書館(『国書総目録』に記載有り)には二冊所蔵されており、そのうち一冊には精緻な注釈が施されている。鎌倉・報国寺には『東歸集』にさらに精緻な書入れをした注釈書が存在していた。いずれも本格的な注釈書にも関わらず、これまでその存在すら明らかになっていなかった。

また、自筆本と比較した結果、史料編纂所蔵の写本は自筆本のすべてを写しているわけではないことが判明した。自筆本が、冊子本と卷子本の二つの形態に分かれていることが原因と思われる。史料編纂所にある写本(「神奈川報国寺蔵本写」)はいずれも冊子本の部分(前半部)にあたることが分かった。

3. 自筆本と版本の比較～版本に見る分類意識～

自筆本と版本の間には特に顕著な違いが見られた。

その一は、偈頌の配列が変更されている点。これには元禄期に編集を担当した臨川寺の竜睡座元の分類意識がうかがえる。例えば、自筆本には詩と散文が分類されていない状態で混在している。しかし、版本では別に項目を立てて散文は後半部分に移動している。他にも全体に渡って配列の変更があり、その原因を考察する。

その二は、自筆本には存在するが、版本には存在しない偈頌が十首確認されたことである。つまり、版本編纂段階で、削除された偈頌があるわけである。削除された偈頌の多くは大きな欠損があることからそれが原因の一つと考えられるが、残りのものはほとんど欠損していない。これらの偈頌が削除された理由は何なのか、これから究明したい。

またそれとは逆に、自筆本には存在しないのに版本には存在する偈頌が四首ある。これらはいったいどこから来たのか。いくつかの理由が考えられるが、おそらく版本の編者は自筆本以外に別に依拠資料を持っていたと思われる。例えば『本朝高僧詩選』(元禄八年、天岸慧廣も一首収録)の如きアンソロジーを使用した可能性もある。

その三に、詩題の変更が挙げられる。版本では九首の偈頌の詩題が変更されている。特に注目すべきは、そのうち八首の詩題が、どこか一部を削られていることである。この理由は何なのだろうか。以上のような問題点をこれから究明したいと考えている。

寄贈資料一覧

(平成17年4月～平成17年7月)

■一般書籍

タイトル	発行所(発行年)
Dao:A Journal of Compative Philosophy Vol.IV.No.1	Global Scholarly Publications (2000.4) [佐藤保氏 寄贈]
光復初期の台湾思想と文化的転型	台湾大学出版中心(2005.4) [佐藤保氏 寄贈]
東亜古代政治と教育	台湾大学出版中心(2004.6) [佐藤保氏 寄贈]
孔子の素論	台湾大学出版中心(2004.12) [佐藤保氏 寄贈]
東亜近世耶蘇会史論集	台湾大学出版中心(2004.11) [佐藤保氏 寄贈]
東亜文化圏の形成と発展 政治法制篇	台湾大学出版中心(2005.4) [佐藤保氏 寄贈]
東亜文化圏の形成と発展 儒家思想篇	台湾大学出版中心(2005.4) [佐藤保氏 寄贈]
二十一世紀大学教育の新挑戦	台湾大学出版中心(2005.4) [佐藤保氏 寄贈]
二十一世紀大学教育の新展望	台湾大学出版中心(2005.4) [佐藤保氏 寄贈]
觀看・敘述・審美 唐宋題画文学論集	中央研究院 中国文哲研究所(2004.6) [佐藤保氏 寄贈]
閑渡・花園	台北芸術大学(2004.3) [佐藤保氏 寄贈]
戦国楚簡研究	万巻樓(2004.12) [佐藤保氏 寄贈]
禅的智慧	法鼓文化(2002.1) [佐藤保氏 寄贈]
国立政治大学哲学学報 国際荀子研究專号	国立政治大学哲学系(2003.12) [佐藤保氏 寄贈]
聖嚴法師学思歷程	法鼓文化(2004.9) [佐藤保氏 寄贈]
明末仏教研究	法鼓文化(2000.8) [佐藤保氏 寄贈]
書籍文化史2	中央大学文学部(2001.1) [鈴木俊幸氏 寄贈]
書籍文化史3	中央大学文学部(2002.1) [鈴木俊幸氏 寄贈]
書籍文化史4	中央大学文学部(2003.1) [鈴木俊幸氏 寄贈]
書籍文化史5	中央大学文学部(2004.1) [鈴木俊幸氏 寄贈]
書籍文化史6	中央大学文学部(2005.1) [鈴木俊幸氏 寄贈]
中央大学蔵狂歌関係書解題目録	中央大学図書館(2005.3) [鈴木俊幸氏 寄贈]
近世信濃における書籍・摺物の文化についての総合的研究	中央大学文学部(2003.3) [鈴木俊幸氏 寄贈]
Mencian Hermeneutics -A History of Interpretations in China-	Transaction Publishers (2001)
禅論	法鼓文化(1999.4)

■目録

タイトル	発行所(発行年)
高遠藩 進徳館蔵書目録	高遠町図書館(2004.5)
日本全国書誌	国立国会図書館(2005.4)
竹山文庫目録	新潟大学附属図書館旭町分館(1998.1)
静岡女子短期大学蔵和田文庫目録	静岡女子短期大学附属図書館(1982.2)
佐野文庫敬徳書院蔵書目録付京屋(野口家)文書・佐野家文書	新潟大学附属図書館(1974.3)
片口文庫目録	小杉町立図書館(1984.3)
伊東富太郎コレクション2-木綿文庫目録-	多度町教育委員会(2004.1)
木曾須原定勝寺所蔵和古書および大般若波羅密多經目録 附 蔵書目録「浄戒山口庫品目」	中央大学近世文学ゼミナール(2005.3) [鈴木俊幸氏 寄贈]
近世日本における書籍・摺物の流通と享受についての研究 書籍流通末端業者の網羅的調査を中心に	鈴木俊幸(1999.3) [鈴木俊幸氏 寄贈]
大垣市立図書館 郷土資料目録 第1集 家分文書	大垣市役所(1973.3)
大垣市立図書館 郷土資料目録 第2集 家分文書	大垣市役所(1974.3)
大垣市立図書館 郷土資料目録 第3集 家分文書	大垣市役所(1976.3)
大垣市立図書館 郷土資料目録 第4集 家分文書	大垣市役所(1979.3)
大垣市立図書館 郷土資料目録 第5集 家分文書	大垣市役所(1981.3)
大垣市立図書館 郷土資料目録 第6集 家分文書	大垣市役所(1984.3)
大垣市立図書館 郷土資料目録 第7集 家分文書	大垣市役所(1987.3)
大垣市立図書館 郷土資料目録 第8集 家分文書	大垣市役所(1989.3)
大垣市立図書館 郷土資料目録 第9集 家分文書	大垣市役所(1990.3)
大垣市立図書館 郷土資料目録 第10集 家分文書	大垣市役所(1991.3)
大垣市立図書館 郷土資料目録 第11集 家分文書	大垣市役所(1992.3)
大垣市立図書館 郷土資料目録 第12集 家分文書	大垣市役所(1993.3)
大垣市立図書館 郷土資料目録 第13集 家分文書	大垣市役所(1994.3)
大垣市立図書館 郷土資料目録 第14集 家分文書	大垣市役所(1995.3)
大垣市立図書館 郷土資料目録 第15集 家分文書	大垣市役所(1996.3)
大垣市立図書館 郷土資料目録 第16集 家分文書(梶川家・戸田縫殿家)	大垣市役所(1997.3)
大垣市立図書館 郷土資料目録 第17集 和田家文書	大垣市役所(1998.3)
大垣市立図書館 郷土資料目録 第18集 家分文書	大垣市役所(1999.3)
大垣市立図書館 郷土資料目録 第19集 和田家文書	大垣市役所(2000.3)
大垣市立図書館 郷土資料目録 第20集 家分文書	大垣市役所(2001.3)
大垣市立図書館 郷土資料目録 第21集 家分文書	大垣市役所(2002.3)
大垣市立図書館 郷土資料目録 第22集 家分文書	大垣市役所(2003.3)
大垣市立図書館 郷土資料目録 第23集 家分文書	大垣市役所(2004.3)
大垣市立図書館 郷土資料目録 第24集 家分文書	大垣市役所(2005.3)
半田市立図書館蔵書目録 和装本編 附FD	半田市立図書館(1992.1)
上野市立図書館漢籍目録	上野市立図書館(1994.9)
聖澤文庫目録	加賀市立図書館(1985.3)
看雲文庫目録 コピー-A4版	形成社(1991.11)
鈴鹿市立図書館蔵漢籍目録	鈴鹿市立図書館
磐田市立図書館赤松文庫目録	磐田市立図書館(1971.3)
花岡虎三氏寄贈名家短冊目録	石川県立図書館(1981.3)
森田文庫目録	石川県図書館協会(1994.3)
鏡石文庫目録	石川県立図書館(1991.3)

寄贈資料一覧

(平成17年4月～平成17年7月)

目録

タイトル	発行所(発行年)
月明文庫目録	石川県立図書館(2003.3)
蔵書目録工学産業編 昭和42年12月現在	石川県立図書館(1968.3)
蔵書目録歴史編 昭和43年3月現在	石川県立図書館(1969.3)
蔵書目録総記編 昭和44年3月現在	石川県立図書館(1970.3)
蔵書目録文学編 昭和46年3月現在	石川県立図書館(1973.3)
蔵書目録哲学・宗教編 昭和47年3月現在	石川県立図書館(1974.3)
蔵書目録社会科学編1 教育・民族・風俗習慣・国防・軍事 昭和49年3月現在	石川県立図書館(1975.3)
石川県郷土資料総合目録 昭和51年3月現在	石川県立図書館(1977.12)
蔵書目録社会科学編(3)・工学編 昭和53年3月現在	石川県立図書館(1981.3)
増加図書目録総記・哲学・歴史編 昭和53年3月現在	石川県立図書館(1983.3)
蔵書目録社会科学編2 経済・財政・統計・社会 昭和53年3月現在	石川県立図書館(1980.3)
石川県郷土資料総合目録追録版 昭和51年～昭和59年	石川県立図書館(1986.3)

報告書

タイトル	発行所(発行年)
日本文化と神道(Japanese Culture and Shinto No.1)第1号	國學院大学21世紀COEプログラム研究センター(2005.2)
日本文化と神道(Japanese Culture and Shinto No.1)第1号	國學院大学21世紀COEプログラム研究センター(2005.2)
中国宗教学研究国際シンポジウム	京都大学人文科学研究所(2004.12)
漢字と文化	京都大学人文科学研究所(2005.2)
日中の文化関係を考える	法政大学国際日本学研究センター(2005.2)
陽明学 第17号	二松学舎大学東アジア学術総合研究所陽明学研究部(2005.3)
二松学舎大学東アジア学術総合研究所集刊 第35集	二松学舎大学東アジア学術総合研究所(2005.3)
二松学舎大学東アジア学術総合研究所集刊 第35集	二松学舎大学東アジア学術総合研究所(2005.3)
東アジアにおける漢字文化活用の現状と将来 報告書	二松学舎大学21世紀COEプログラム事務局国際シンポジウム実行委員会(2005.3)
非文字資料研究 No7	神奈川大学21世紀COEプログラム「人類文化研究のための非文字資料の体系化」研究推進会議(2005.3)
心の解明に向けての総合的方法論構築	慶應義塾大学21世紀COE人文科学研究拠点 心の総合的研究センター(2004.6)
三島中洲研究会会報	二松学舎大学 町屋寿部研究室(2005.3)
2004年度東アジア人情報サマナーセミナー報告書	京都大学人文科学研究所(2004.11)
心の統合的研究センター Newsletter No.9	慶應義塾大学(2005.3)
古代日本形成の特質解明の研究教育拠点 奈良女子大学 21世紀COEプログラム報告集Vol.1 古代日本を読む 東アジアの文字環境 Vol.1	奈良女子大学人間文化研究所COEプログラム(2005.3)
奈良と古代 第2号	奈良女子大学21世紀COEプログラムNewsletter編集委員会(2005.3)
中国研究集刊 講号(第三十六号)	大阪大学中国哲学研究室(2004.12) [佐藤保氏 寄贈]
中華仏学研究 第九期	中華仏学研究所(2005.3) [佐藤保氏 寄贈]
法鼓山中華仏学研究所図書資訊館運営周年暨図書館週紀念特刊	法鼓山中華仏学研究所図書資訊館(2003.6) [佐藤保氏 寄贈]
耕耘播種 中華仏学研究所20周年特刊	中華仏学研究所(2001.11) [佐藤保氏 寄贈]
台湾東亜文明研究学刊 創刊号	国立台湾大学東亜文明研究中心(2004.6) [佐藤保氏 寄贈]
東亜文明研究通訊 第五期	国立台湾大学東亜文明研究中心(2004.10) [佐藤保氏 寄贈]
東亜文明研究通訊 第六期	国立台湾大学東亜文明研究中心(2005.1) [佐藤保氏 寄贈]
二松学舎大学人文論叢 第73輯	二松学舎大学文学部(2004.10)
DALSニューズレター 第9号	東京大学大学院人文社会系研究科(2005.5)
大東文化学院創立過程基本資料	大東文化大学人文科学研究所(2005.5)
図象文誌書情報目録 資料2	神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議(2005.3)
先端社会研究 第2号	関西学院大学出版会(2005.3)
二松学舎大学論集 第48号	二松学舎大学文学部(2005.3)
二松 第18号	二松学舎大学大学院(2005.3)
人文論叢 第73輯	二松学舎大学文学部(2004.10)
人文論叢 第74輯	二松学舎大学文学部(2005.3)
非文字資料研究 No8	神奈川大学21世紀COEプログラム「人類文化研究のための非文字資料の体系化」推進研究会議
東亜文明研究通訊 第七期	国立台湾大学東亜文明研究中心(2005.4)
法鼓山僧伽大学 九十二年年度年報	法鼓山僧伽大学(2004/12)
近代大坂の都市文化	大阪市立大学大学院文学研究科都市文化研究センター(2005.3)
中国都市文化研究の史料と方法	大阪市立大学大学院文学研究科都市文化研究センター(2005.3)
大阪市立大学東洋史論叢別冊特集号	大阪市立大学大学院文学研究科都市文化研究センター・東洋史研究室(2005.3)
奈良と古代 奈良女子大学21世紀COEプログラムNewsletter	奈良女子大学21世紀COEプログラムNewsletter編集委員会(2005.6)
東アジア学術総合研究所 通信 第15号	二松学舎大学 東アジア学術総合研究所(2005.7)
21世紀COEプログラム愛知大学国際中国学研究センター News Letter	愛知大学国際中国学研究センター事務局(2005.6)

雑誌その他

タイトル	発行所(発行年)
中央研究院中国文哲研究所	中央研究院中国文哲研究所(2002.10) [佐藤保氏 寄贈]
CBETA電子佛典集成	中華電子佛典協会(2005.2) [佐藤保氏 寄贈]
耕耘播種 中華仏学研究所成立22周年成果簡介	中華仏学研究所 [佐藤保氏 寄贈]
中華佛学研究所	中華佛学研究所(2003) [佐藤保氏 寄贈]
Dharma Drum Mountain	法鼓山
大学公開講座講義資料(九段キャンパス) 書道講座	二松学舎大学(2005.8)
大学公開講座講義資料(九段キャンパス) 教養講座	二松学舎大学(2005.8)
大学公開講座講義資料(柏キャンパス) 教養講座	二松学舎大学(2005.8)
大学公開講座講義資料(柏キャンパス) 書道講座	二松学舎大学(2005.8)

※ご寄贈いただき感謝申し上げます。

活動・会議一覧

(平成17年4月～平成17年7月)

●講演会

■テーブルスピーチ

開催日	主催等	講師	所属	演題
17.06.23	COE	李慶	金沢大学外国語教育研究センター・外国人教師	「日本の漢学について」
17.07.06	漢文教育班	石毛 慎一	神奈川県立ひばりヶ丘高等学校・教諭	「近代漢文教育史の一考察 -"忠"考教材を中心として-
17.07.28	COE	高橋 均	大妻女子大学短期大学部・教授	「藤原頼長の経学研究 -その目指したもの-
17.07.30	近世・近代班	狭間 直樹	京都産業大学・客員教授	「善隣訳書館と岡本韋庵」

●現地調査

■国内調査等

氏名	期間	行き先	主な調査機関
會谷 佳光	17.04～17.07.	成田市	成田仏教図書館
清水 信子	17.04.04	港区	慶應義塾大学・斯道文庫
會谷 佳光	17.05.06	文京区	東洋文庫
會谷 佳光	17.05.25	千代田区	お茶の水図書館
會谷 佳光	17.06.03	世田谷区	駒澤大学附属図書館
清水 信子	17.06.17	台東区	上野学園日本音楽資料室
會谷 佳光	17.06.24	鎌倉市	松が岡文庫
清水 信子	17.06.30	世田谷区	静嘉堂文庫
清水 信子	17.07.04	港区	慶應義塾大学三田メディアセンター
青木 五郎	17.07.11～17.07.12	つくば市	筑波大学附属図書館
磯 水絵	17.07.21～17.07.22	京都市	財)陽明文庫
町 泉寿郎	17.07.29	甲府市	山梨大学
上地 宏一	17.07.29	甲府市	山梨大学

■海外調査等

氏名	期間	行き先	主な調査機関
佐藤 保	17.05.02～17.05.08	台湾	台湾大学
會谷 佳光	17.06.26～17.06.30	台湾	中華仏学研究所

●諸会議

■推進委員会

第 9回	17.04.06
第10回	17.05.11
第11回	17.06.15
第12回	17.07.06
第13回	17.07.20

■実施委員会

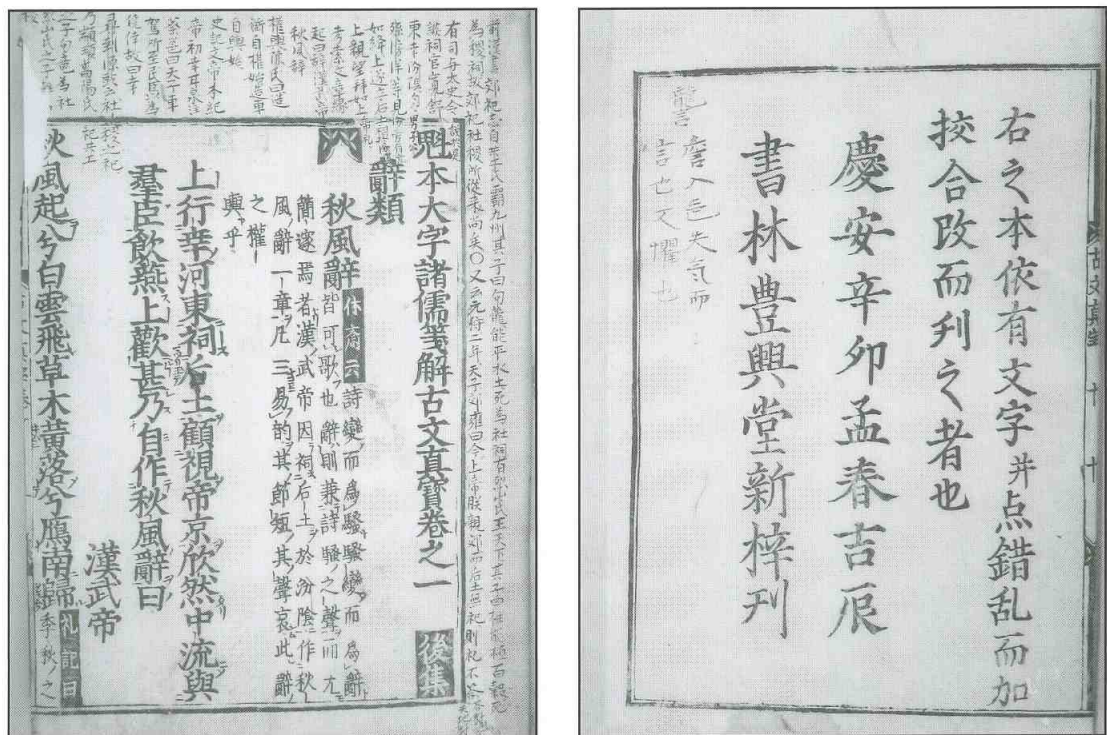
第29回	17.04.20
第30回	17.05.11
第31回	17.06.01
第32回	17.06.29
第33回	17.07.20

■事業推進担当者会議

第 8回	17.04.21
第 9回	17.05.26
第10回	17.06.23
第11回	17.07.28

■編集委員会

第 1回	17.04.21
第 2回	17.05.12
第 3回	17.06.15
第 4回	17.06.23
第 5回	17.07.28



古文真宝書影3
『魁本大字諸儒箋解古文真宝後集十卷』
慶安四年書林豐興堂校点重刊本

編集後記

雙松通訊 第3号をお届けします。昨年度後期より始まった本プログラムも、年度の更新を挟んで、早一年を迎えようとしています。

昨年度は、COEプログラム関連の機構整備を中心に活動しましたが、今年度(17年度)は来年の中間評価にむけて、いよいよ私どもの研究計画の中心的活動を顕在化させる年度であります。本号はこれら研究計画とプログラム全体の方針を中心に、編集いたしました。

なお、来年度以降の活動も見越して、本年度は海外も含めた多様な研究協力体制の構築を計画しつつあります。組織的連携はもちろん、学会・研究会等の協力体制の構築も含めて、私どもから提案させていただく場合の他、多くのご提案・お申し出を期待しております。(T)



『草場家集印』より
平成八年鈐印本

雙松通訊 No.3

発行日

平成17年8月31日

編集・発行

二松學舎大学 21世紀COEプログラム 実施委員会

〒102-8336 東京都千代田区三番町6-16
TEL : 03-3261-3535 FAX : 03-3261-3536
e-mail : coejimu@nishogakusha-u.ac.jp
URL : <http://www.nishogakusha-coe.net/>